



## 本学の「良心」にして経済学部の「お父さん」である 坂本秀夫先生に捧ぐ!

白井雅子\*

### <序奏>

坂本先生、とうとう定年退職…!?本当に辞めるの?え〜?そんなの無いよ、私、先生にオンブにダッコだったもの、ホントに困っちゃう

〜…!! (オロオロ…)

……いや、コレって真面目に書かなければならないんだっけ?マズイ、どうやら日頃の坂本先生の「おふざけ」に完全に染まってしまっていたわ〜…。(咳払い)

---

\* 明星大学経済学部 特任教授

## ＜第1主題部＞

一番最初に坂本先生と知り合ったのは、まだ自分が学部生（早稲田大学教育学部）の頃だった。坂本先生はそのとき博士後期課程の院生（早稲田大学大学院商学研究科）だったか、学部の定期試験の監督をされていた。民法の試験だったと記憶している。解答を書き終えて終了時刻前に席を立ち、試験監督員に答案を提出してそのまま教室を出ようとしたら「ちょっと、キミキミ」と呼び止められた。名前の書き落としでもあったかと振り向いたら「ここは法学部の試験だよ、大丈夫？」「え？…いえ、ちゃんと履修してます」「ほんと～？間違っていない～？」「他学部聴講ですが」「へ～そうなの？」レンズの大きな眼鏡に広いおデコでニマニマしたやたらと「あ・かるい」感じのするオジニイさんだと思った。この後もいくつかの科目で試験監督を受けたが、私を見つけるとニマっと（と当時は思った）笑い、提出した答案をわざわざ持ち上げてしげしげと見ていたりする。なんなんだこの人は、と思っていたがきっとからかわれていたのだろう。私が大学院（早稲田大学大学院法学研究科）に進学した後もごくたまに学内ですれ違ってこんにちは、くらいは言ったりすることがあったものの、いつしか見かけなくなって忘れていた。

それから20年近く経っていたらどうか。中央学院大学法学部に非常勤講師として出講していたある日、授業終わりで最寄駅への学バスを待っていたところ背後から「もしもし？良ければこの後お茶して行きませんか？」と声をかけられた。はあ？と振り向くと半白髪のおデコの広いオッさんがニマニマと笑いかけている。このあ・かるさ、どこかで見たことがあるような？誘いについてしまったものの、カフェで片手にアイスコーヒー、片手で煙草スパスパ（現

在は吸わないが先生は以前は1日2箱ほどのヘビースモーカーだった）しつつ、いかにも「ワタシは偉いんだ、わっはっは！」な姿に違和感のような既視感を感じつつもすぐにはわからなかった。「早稲田出身の臼井さんだよ。何十年かぶりかな？」と言われて記憶を手繰り寄せたが、は？これがあのオジニイさんの成れの果てか？

先生もまた中央学院大学の大学院に非常勤講師として出講されていたのだった。不敬にもつい成れの果てとってしまったが、それ以来何くれとなくお世話になったり（その最大のものは明星大学着任に向けて声をかけてくださったことである）、さまざまなことを教わってきたりして、ま～ったく頭が上がらないでいる。

## ＜Trio（中間部）＞

「ワタシは偉いんだ、わっはっは！」は伊達や酔狂ではなく、実際先生の前では稲穂のようにふか～く首を垂れるしかない。

坂本先生は福井県坂井郡春江町（現・坂井市春江町）のご出身で、1972年4月早稲田大学商学部に入學（それ以来ずっと東京および埼玉県在住なのでご本人は標準語を喋っているおつもりらしいが、よく聞くと完全ではなく微妙～？に福井弁訛りが混じっている）、その後早稲田大学大学院商学研究科に進学し1979年3月商学研究科商学専攻博士前期課程修了、さらに1982年4月に同商学研究科博士後期課程に進まれた。博士前期課程修了から後期課程入学までなぜか3年分の空白？停滞？があるのだが、しかし後述するようにこの後のご活躍は凄まじい。

1987年3月に博士後期課程を単位取得満期退学され同年4月に富士短期大学経営学科専任講師に着任、順調に同経営学科助教授・教授となられ、その間1999年4月には富士短期大学経営

研究所副所長にも就任されている。そして2001年4月より明星大学経済学部経済学科教授に着任し、2006年4月の大学院経済学研究科の設置にもご尽力された。その他非常勤講師として山梨大学・中央大学など学部出講が合わせて5校、大学院にも中央大学大学院に中央学院大学大学院と2校に出講されている。また1988年4月～1993年3月、中小企業事業団（現・中小企業基盤整備機構）中小企業研究所で客員研究員も務められた。

学歴・職歴以上にすごいのは研究業績である。

まず著書のうち単著は合計14冊：(1)「日本中小商業の研究」信山社・1989年、(2)「現代マーケティング概論」信山社・1993年、(3)「現代中小商業問題の解明」信山社・1994年、(4)「現代日本の中小商業問題」信山社・1999年、(5)「大型店出店調整問題」信山社・1999年、(6)「現代流通の解説」同友館・2001年、(7)「日本中小商業問題の解析」同友館・2004年、(8)「新版・現代流通の解説」同友館・2005年、(9)「現代マーケティング概論（第2版）」信山社・2005年、(10)「現代流通の解説（三訂版）」同友館・2008年、(11)「日本中小商業問題の解析（改訂版）」同友館・2010年、(12)「現代中小商業論」同友館・2012年、(13)「現代流通の諸相」同友館・2016年、(14)「現代流通の理論と実相」同友館・2021年。

共編著は(1)「21世紀型企業」同友館・1990年、(2)「ロードサイドショップ」同友館・1993年、の2冊。共著は合わせて9冊（うち2冊についてはまだ院生時代に執筆し、出版されている）。さらに論文は確認できた（業績プロに記録されていた）分だけで、合計51本以上（実際にはこれよりはるかに多いと推測できる—つまりは本人にも正確な数はわからないらしい…。）その他の研究報告書・書評・辞事典な

ど計34本…もう書き切れないから共著や論文等の名称は挙げる（いやあ～、書きまくりましたねー）。

先生の学術上の最盛期には論文を書こうとすると「文章が天から降ってきた」ものなのだそうだが、宜なるかな。論文・著書等の業績一覧は確認できるだけでも100本を優に超える項目数を誇っている。それだけでなく研究業績に入らないエッセーやコラムなどの類も数多い。どれだけの量の文章を書いたのか、とっくの昔にご本人にもわからなくなっているのだそうだ。

また、上記(7)の「日本中小商業問題の解析」を学位請求論文とし、2005年3月に中央大学から博士（商学）号を授与された。さらにこの著作は所属学会2団体の学会賞をダブル受賞した〔第2回日本商業施設学会賞（優秀作品賞）（2005年9月）と第9回日本流通学会賞（2005年10月）〕。量と質とがまさに比例する、研究者のなかの研究者であられる。

だから、専門分野の学会においても超有名人であった（Wikipediaにも掲載されている）。所属学会は計10学会になり、学会発表や活動も数多い。ごく代表的な全国大会レベルの活動のみを挙げると：(1)1999年11月・日本流通学会第13回全国大会第3部会座長、(2)2000年9月・日本中小企業学会第20回全国大会第2分科会において予定討論者、(3)2001年10月・日本流通学会第15回全国大会統一論題会場において論題コメンテータおよびパネリスト、(4)2003年4月オフィス・オートメーション学会第46回全国大会第6会場座長、(5)2003年10月日本流通学会第17回全国大会第4分科会座長、(6)2006年10月日本流通学会第20回全国大会統一論題会場においてパネリスト、(7)2013年9月日本商業施設学会第12回全国大会（於明星大学）において準備・運営委員会委員長。地方大会の発表や活動は優に10件を超える。

学会でのさまざまな役職も歴任された。これも主要なもののみ挙げると：(1) オフィスオートメーション学会（幹事・1987年10月～1992年9月）、(2) 日本流通学会（①幹事・1991年10月～1999年9月および2014年11月～2017年10月、②編集委員会編集委員・1993年10月～1997年9月および2000年11月～2003年9月—これらの役職ではいわば返り咲き？—、③理事・1993年10月～2014年11月、④編集委員会編集委員長・1997年10月～2000年10月、⑤学会賞選考委員会学会賞選考委員・2023年10月～）、(3) 日本商業施設学会（①評議員・2002年9月～2003年8月、②監事・2002年9月～2005年8月、③理事・2005年9月～2019年8月）。

国際学会のような場での発表などはないものの、ご専門が日本の中小小売業（とりわけ零細小売業）の実態分析と流通政策なのだから、もっぱら日本語による著作・発表が中心となるであろう。なお、坂本先生は日本の零細小売業研究の第一人者であられる。これだけのご活躍の土台を築いたのは、博士後期課程に進まれるまでの（雌伏？の）3年間であったそうだ。階段に踊り場というのがあるように、高く上り切る前の一定の「足踏み」というのはときには付きもの、あるいは大きな発展に向けての必要なステップになることもあるのだ、と先生はしばしばおっしゃっている。

学会以外の社会活動としての委員会等についても、中小企業事業団設置の委員会委員を4件のほか、調布市や八王子市・あきる野市でも委員会の委員長や専門委員を歴任され、その他も合わせると10件務められている。さらに県の商工団体主催の講演会での講演もされた。（ここまでの各業績や活動等を入力するだけでもう指が痛くなったので詳細は省略！）

しかし、やはりご活躍のなかでも白眉なのは学部行政であろう。2011年4月から学部執行部

の役職を12年間務められた：(1) 2011年4月より経済学部経済学科学科主任（1期）、(2) 2013年4月～2017年3月の2期連続で経済学部長（その間2013年4月～2015年3月明星学苑評議員）、いったん(3) 2017年4月から大学院経済学研究科長を1期務められてから再度、(4) 2019年4月経済学部長に返り咲き（他大学を含め知る限り聞いたことない）、(5) 2021年4月またも！大学院経済学研究科長に就任（つまりは役職をピンポン玉か!?というように繰り返し返り咲きを果たしたと。まさに前代未聞でしょ。未確認情報だが学部長会での挨拶で返り咲きならぬ「出戻りました」と言って笑いをとったのかなんとか）、で今年2023年に12年ぶりに役職から解放された…。あ、いやいやまだあった、(6) 2023年4月より大学評議会評議員に就任。（ホントにおつかれさまでございます。しかも12年間も学部執行部に身を置かれながら、それでもその間論文執筆だけでなく、単著を3冊—それも改訂ではなく新規書き下ろしのを出版されているんだよね…。超人か？）学会役職も含めて、先生は本当に返り咲きだけだったようで。それだけ各方面で必要とされた人材でもあられた、ということですね。

### <再現第1主題部>

さまざまところで必要とされ要職を歴任されたというのは、その能力を買われただけでなく人望も備えている、ということである。学部・大学院執行部での役職を学部長（2期連続）→研究科長→学部長→研究科長としかも途切れなく2往復したのは先にも書いたように聞いたことがないが、経済学部のまさに屋台骨となるべき人であった。坂本先生を頼りにし、慕っているのは何人もいるはずである。助言をもらったり手助けを得たり、表面に出ていない



ものも数えれば経済学部内のほぼ全員が思い当たるであろう。それは先生が普段はジョージダンばかり言っておちゃらけている一方で、心の中は真に篤き人だからである。公正と信義を尊び、弱い立場の者や虐げられている者をみると、絶対に黙ってられない人だからである。社会的公平や「すべての個人」の尊重という観点では絶対的な基準をお持ちであり、その点では決しておぼれることがない。それはいわば「良心」と呼ぶべきであろう。先生の行動理念は常に良心であった。

先生の行動は公正さを追求するものであり、そこで先生は経済学部のみならず全学的にもいわば「良心派」のリーダーとしてさまざまな局面で活躍もされていた。そうしたなかではときには是々非々で判断し、ときには全く立場の異なる相手とも手を組むことがあったと聞く。しかし良心というべき中核的な信念については譲ることがなかった。その意味ではまさに「良心的な」人である。

しかも先生の良心は独善的なものではなく、それを元にして発する考えは客観的にみても妥当な基準または解決策として表れるものである。それはある意味「規範」「指針」と言えるものとなる。そのため先生の意見や助言は年齢や経験の面で下の者ばかりでなく先輩や年長者にも広く受け入れられたし、しばしば異なる意見を持つ者からも信頼を寄せられてきた。是々非々で決定し行動することは傍目には日和見的な姿勢とみられてしまう場合もあるわけだが、そのような浅薄な見方を跳ね返すだけの迫力と説得力を持った人物であると受け止められてきた。

このような人格は実は危ういものを孕んでいる。「帰依」の対象となり信仰のようなものを寄せられたり、あるいは祭り上げられたりしてしまうこともある。しかし、先生は賢明にもそ

うした対象となったりいたずらに持ち上げられたりすることを回避してきた。おちゃらけてあ・かるく振る舞うことは、戦略的にあえてそうされたわけではないのであろうが、先生なりの無意識のバランス感覚の発露であるのかもしれない。

## <再現Trio>

坂本先生の篤き心と熱い眼差しは当然学生にも向けられている。授業内での私語は一切許さない、という厳格さもあったが、注意を与えた学生に対しては必ずフォローをされていた。そうするのは当たり前のようだが、このフォローというものの自体、いざやろうとすると言い方やタイミングが案外難しい。これをさりに行なえるセンスがあった。面倒見が良いということで学生からも慕われており、若かりし頃には専門演習は超人気ゼミであったと聞く。先生は研究者として優れていただけでなく優れた教育者でもあられた。

またずっと以前いわゆる「やんちゃ」な学生にわざわざ自分のゼミや科目を履修させ、温かくも熱く厳しく手をかけて指導した、というのが何人もいたという。皆、「坂本先生（の指導）じゃなかったらきっと卒業できなかった」と感謝の言葉を残して巣立っていったそう。このとき先生は教員というだけでなくある意味父（Pater）になっていたのかもしれない。危うくドロップアウトしそうになっている学生たちをみすみす放ってはおけなかったのだろう。グレかけた学生に四の五の言わせないド迫力を先生が持ち合わせていたこともあろうが、これはパターナリズムの理想的な発動だと言えよう。

教員・職員に対してもいい加減なことや間違ったことは許さない厳しさをみせる一方、困っていたり窮していたりすると目ざとくみつ

けて手を差し伸べてくれた。だからといって必要以上には介入してこない。心篤き慈父?のような。だからみんな先生を頼りにする。経済学部のなかで年長者になってゆくうちに、いつしか坂本先生は「経済学部の熱血お父さん」のようになっていったのであろう。

2024年の4月から経済学部の我々はこの大黒柱なしでやってゆかなければならない。「困っちゃう (@.@;) !」者はきっと多い。でも坂本先生の良心・行動理念・判断基準を、感謝しつつしかと受け止め受け継いでゆくことで、我々は必ずやこの明星大学と経済学部を支えていくのだらうと信じている。

BGM:エルガー作曲・行進曲「威風堂々」第1番

## <エンディング>

お父さん先生～、種々のご指導どうもありがとうございました&長きに渡る教員生活本当におかれさまでした！

でもね、最近チト物忘れ・ど忘れが激しくなってきたようで、と～っても心配です。我々一同の名前は忘れちゃっても仕方ありませんが、まかり間違っても奥方のお顔と御名は忘れてはいけませんよ？いつまでも若々しくお元気なままの坂本先生でいてください。……あ、釣りがお好きでよく行かれるようですからきっと退職後は釣り場に日参されるのでしょうかけども、お池にハマってさあたいへん♪にならないよう、くれぐれも！お気をつけくださいませ(^\_-)☆

最後になりましたが、坂本先生が明星大学に与えられた多大なるご尽力とご貢献に対し、僭越ながら経済学部教員一同を代表して、衷心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。